

〔研究ノート〕

戦前昭和期における「令嬢」と音楽

—『婦人画報』にみる箏、三味線、ピアノのたしなみに関する言説をめぐって—

歌川 光 一

Young Ladies and Music in the Pre-war Showa Period:
Focusing on Articles Related to *Koto*,
Shamisen and Piano that Appeared in *Fujingaho*, 1926-1940

Koichi UTAGAWA

This paper introduces and analyzes accounts of young women's skill at playing *koto*, *shamisen*, and piano that appeared in the women's magazine *Fujingaho* between 1926 to 1940. The analysis suggests that, whereas in the Taisho period, young ladies (*reijo* [令嬢]) were encouraged to develop their taste in a number of kinds of Japanese traditional and Western music rather than focusing on just a few kinds and attaining a deeper understanding of the few they had chosen, in the early Showa period, modern Western culture was increasingly accepted as prestigious, and young Japanese women's taste in music came to be seen as a part of their training to be good brides, but at the same time Japanese nationalism that emphasized "Japanese-ness" also came to the fore.

The author concludes that, though further research is needed to confirm this, by the time people began to think that acquiring skills through hobbies was a useful component of bridal training, a new prototype of what young women should be had emerged.

Key words: female accomplishments (女性のたしなみ), music skills (音楽のたしなみ), hobby (趣味), bridal training (花嫁修業), taste for music (音楽趣味), modern Japan (近代日本)

1. 問題の所在

(1) 教育史における花嫁修業というジェンダー規範

宮坂広作は、1960年代の社会教育実践における「花嫁修業」¹の浸透状況を以下のように伝えている。

こんにちの社会教育と芸能のかかわりについていえば、青年団の女子部の学習とか、女子の青年学級の中味には、必ずといってよいくらいお茶、生花、和洋裁がもられ、婦人学級や成人学校の内容にもなっている。日本青年団協議会の全国青年研究集会の女子活動分科会では、「花嫁修業の問題」がしょっちゅうとりあげられ、お茶、お花、料理、裁縫ので

きる人こそ理想的な花嫁だという周囲の考えかたに同調せざるをえないという女子青年の発言に対して、「そんな修業がはたして役に立つのか」、「そんなことばかりして自分自身満足できるのか」という質問が男子青年のがわから浴びせられるのがつねである。女子青年たちはそんなばあい、「ここにいるような意識の高い男の人ばかりならいいんですけど。」とか、「そういうあなたがただって、心の中ではおしとやかで、何でもハイハイということをきく女性の方がいいと思っているのではないでしょうか。」などと答えたり、実用的価値はあまりないことを認めつつも、「疲れた心を癒やし、すさんだ精神を休め、久遠の活力を与えてくれる……現代人が

忘れかけているもっとも大切なもの、真実なもの」がある、といったぐあいに、家元の教えを受け売りして弁明したりする。

(宮坂 1970: 224, 下線—引用者, 以下同様)

宮坂が指摘するジェンダー規範としての花嫁修業は、生涯学習・社会教育研究において実証的な学習要求調査の嚆矢とされる辻 (1973) でも指摘されている。辻は、1970年代初頭における「学習内容の多様化」という認識を前提としつつ、成人の学習要求を規定する因子としての性と年齢を抽出し、とりわけ20歳代の男女の学習要求の不一致としての「花嫁修行」の存在を明らかにしている (辻 1973, 市原 2003)。辻は花嫁修業を「伝統的な家庭生活上の学習項目」とも表現しており、具体的には、「料理・栄養の知識・技術」「手芸の知識・技術」「洋裁の技術」「和裁の技術」「衣服に関する知識」「お茶 (茶道) の知識・技術」「お花 (華道) の知識・技術」「礼儀・作法の知識」等を挙げている (辻 1973: 47-67)。

戦後の教育学研究において花嫁修業は、専ら乗り越えるべき封建遺制として認識されてきた。堀垣一郎は、「技術習得のみにおちいりやすい内容」として生花を例とし、「青年学級生花コース (草月流)」について、「人間的つながり (集団性) と自主的・主体的に思考する自主性、学習性を発展させ、社会的関連でものごとを構造的にとらえる訓練をおこない、あわせて、技術習得をもねらう学習計画を提案している (堀垣 1967: 117-121)。宮坂はこれに対して、「茶道・華道・日本舞踊などといった民族的・伝統的芸能が、こんにち体制的イデオロギー、保守的で非合理的な意識にまといつかれていることは明らかだが、こうしたものになんとか教育的価値を導入しようとする提言」と評価している (宮坂 1970: 232)。

しかし、稲垣恭子が述べるように、女性と教養をめぐる言説を「進歩／抑圧」の図式のなかに位置づけ、「抑圧」の立場から花嫁修業を封建遺制として批判したり、逆に伝統として賛美することは、図式そのものの問い直しにつながらない (稲垣 2009)。

前掲宮坂の言の中には、花嫁修業の対象として、

結婚生活に「実用的価値はあまりない趣味活動」のようであり、「おしとやかで、何でもハイハイということをし女性」を連想させる伝統芸術が含まれている。この、趣味活動にもみえる伝統芸術は、都市新中間層²が生成・拡大していった明治後期・大正期から昭和期の日本において、「良妻賢母」の浸透をはじめとするジェンダー規範の変化とどのように関連しながら結婚前の修養の対象として位置づけられていったのであろうか。

(2) 戦前期の「令嬢」像への着目

筆者は上記の関心に基づき、19世紀末～20世紀初頭の日本における都市新中間層を含む中上流階級女子の音楽のたしなみをめぐる言説を明らかにしてきた (拙稿 2015, 2016)。本稿では、中上流階級女子の「趣味」の和洋折衷化と結婚前の修養化が萌した後の、戦前昭和期における「令嬢」の音楽のたしなみをめぐる言説の変遷をみる。

近年、女性とメディアをめぐる文化史研究においては、必ずしも学校教育を入口としない、新聞や雑誌をはじめとするメディアにおける理想的女子像の研究が盛んになりつつある。戦前期の中上流階級女子においては、「少女」が女学校と雑誌という空間の中で、「良妻賢母」とは異なる規範として成立し、女子にとって魅力あるジェンダー・アイデンティティとなった一方で、「家の娘」(久米 2013: 98-106)、「孝行娘」(今田 2007: 103-105) に代表される理想像も消え去ったわけではなかった (拙稿 2016: 48)。高貴な娘は、メディアの中で、「令嬢」と形容されつつ、戦前期を通じて新聞・雑誌等に度々登場した (同上: 48)。マス・メディアに登場する「令嬢」は、小学生～高等女学校卒業後である場合が多く、「少女」と年齢をほぼ同じくするが、(多くの場合、) 来るべき異性との結婚生活を連想させるものであったため、少女雑誌ではなく、婦人雑誌のグラビアに登場した (佐久間 1995)。「令嬢」は、「見られるべき娘」として、周東美材が述べるように、「生まれながらの存在というよりも、女性が目指すべき規範として、消費の欲望とも絡みあいながら提示されていた」(周東 2011: 77)。

「令嬢」のプロフィールに着目した音楽史、女性文化史研究としては、高月・能澤(2003)、津上(2012a, 2012b)、陳(2016)、周東(2011)、歌川(2015, 2016)等を挙げるができる³が、戦前昭和期の令嬢のプロフィールに着目した研究は、いずれもピアノと長唄のたしなみの威信の高さを指摘している。同時期の令嬢のたしなみとしての長唄のイメージ向上の背景については、秩父宮妃勢津子(松平節子)やその妹松平正子が長唄をたしなんでいたことや、同年4月に東京音楽学校に長唄科が新設されたことが想定されている(拙稿2015)が、そこでは戦前昭和期の「令嬢」の音楽のたしなみの対象やその位置づけについては経時的には考察されていない。

本稿では、月刊婦人グラビア雑誌『婦人画報』(東京社)1926年1月号～1940年12月号(244～442号⁴)における「令嬢」のたしなみとしての音楽に着目し、①画報欄の「令嬢」の音楽(箏、三味線、ピアノ)のたしなみを紹介するグラビア記事、②読物欄のa. 音楽に関する記事、b. 「令嬢」をタイトルに含む記事、c. 名士・名流婦人が自身の娘の教養のあり方に言及する記事のうち、女子の音楽のたしなみに言及している記事を経時的に検討する⁵。

なお、高月・能澤(2003)、周東(2011)、歌川(2015, 2016)等の先行研究から、戦前期昭和期に「令嬢」がたしなむ音楽として主流だったのは箏、三味線(主に長唄)、ピアノであったことが示唆されており、本稿でも主にこの3ジャンルの位置づけに着目した。

2. 家庭音楽論の継続

明治後期から大正期にかけて「家庭音楽」論が家庭婦人の洋楽のたしなみの必要性を強調したことが知られている(周東2011, 玉川2017ほか)が、戦前昭和期の『婦人画報』においても同様の論説記事を見ることができる。

工学博士大熊喜邦は「家庭団樂の居間とその設備」(1926.1 [244号]: 131-133⁶)において、建築学の立場から家庭の居間のあり方に言及している。

瀟洒な日本座敷の心ゆくばかり物静な居間、そこにも捨てられぬ言ふに言はれぬ情味はあるが、火鉢

は煖炉に変わり、家庭の音楽趣味は琴からピアノに遷る趨勢の濃い近代の家庭では、豊満な腰掛式……敢て洋風とは言はぬ……の居間、それが一時的の流行でなく、真に味ひ得られる団樂の情調に満ちてゐるのであらう。(同上: 132, リーダー野は大熊による)

また小松耕輔は「家庭と音楽」(1926.6 [249号]: 112-113)において以下のように述べる。

家庭に音楽が無いのは、恰度花園に花の無いやうな感じがいたします。此点で私は欧米の家庭を羨しく思はずにはゐられません。／我国の家庭にも勿論音楽はあります。しかし在来の我国でとりあつかはれた音楽は、外国のそれとは余程異なつたものゝやうに考へられます。我国の家庭音楽は家庭個人々々の趣味で、家庭が挙つて楽しむといふことが尠ないのではないでせうか。／例へば主人は謡曲、奥さんは長唄、子供達はピアノといった風に、各々が勝手にやつてゐるので、一家団樂のうちに合唱したり、合奏したりすることが尠ないやうに思ひます。それでは一家結合の中心としての音楽では無く、個人々々の趣味性を満足させるに過ぎません。／欧米の家庭を見ますと、主人はヴァイオリン、主婦はピアノ、娘さんは歌ふといふやうになつてゐるから全体が一つの音楽を中心として結合してゐるのです。これは確に家庭にとつて必要なことゝ思ひます。／外国の家庭ではお茶や、晩餐のあとで、よく音楽を演奏して楽しめます。さういふ時には、お互にピアノを奏し合つたり、歌をうたつた[り]いたしますが、我国の家庭ではどんな会合にでもめつたに演奏しあふといふことをしません。お互に遠慮しあつて、折角覚えた音楽をこつそりとおくのですから、全く宝の持腐りといふべきでせう。上手下手は第二として、先づ自分のもつてゐる音楽をもつて客人をよろこばせるといふことは誠にゆかしいことではありませんか。(同上: 112)

小松の家庭音楽論は、一家団樂の創出に加え、客人のもてなしにも及んでいるが、その手段としてピアノが重視されている。

当時、洋楽のたしなみの必要性を強調する家庭音

楽論もあくまでアマチュア性を重視するものであった。伊庭孝は「家庭と音楽と楽器（いかなる音楽も是には敵はぬ—）」（1928.4 [272号]: 99-102）でピアノが基本的に家庭音楽に適している理由を挙げ、以下のように述べる。

家庭に於ける音楽といふものは、厳密な意味でいふ純芸術ではなく、むしろ修養としての一科目である。〔中略…引用者〕／家庭で音楽をやつてゐる分には、大して面白くなくても、どこからも苦情は出ない。是が入場料をとつての演奏会となれば、どうした〔たつ〕て人を感動させ [せな] ければ繁昌しないであらう。さういふ目的とする態度を、家庭に於てするといふ事は賛成いたし兼ねるのである。（同上: 100）

家庭音楽論は1930年代後半に入っても、ダン道子「一家庭に一楽器 音楽は二様のうちから始めませう」（1938.6 [412号]: 226-228）、園部三郎「音楽的雰囲気如何にして家庭に取入れるか」（1939.4 [422号]: 120-121）、山田耕筰「音楽と生活（座談会）」（1939.4 [422号]: 126-135）、「技術家としての家庭婦人」（1939.5 [423号]: 7）で繰り返された⁷。医師佐々木好母氏令嬢佐々木瑠璃子は「家庭と音楽」（1939.8 [426号] 画）で、ピアノの前に座る自身の横に以下のような文章を寄せている。

一日の汗を湯浴みに流し晚餐後の一時を寛いで、一家揃つて弾いたり歌つたりして過すのは如何でせう。夕刊を御覧になるお父様。兵隊さんの靴下を編みながら声を合せるお母様。学校の唱歌をおきかせる幼い子。伴奏なさるお姉様。何と微笑しい光景ではございませんか。疲れもとんで明日の生活への力も湧きます。

3. 家庭における趣味の一致と「令嬢」の日本趣味の強調

(1) 趣味の一致

家庭音楽論の第一目的は家庭婦人による一家団欒の創出であったが、夫婦間において重視されたのは「趣味の一致」である。

夫の趣味に同化すること——従来の家庭円満法に必ずある項目です。でもあなたのことですから、あまりに時代ばなれのした男性を選ぶことはない筈です。たゞ尺八だけが趣味で後は何もをも排撃するなんていふ男性は頗る憂鬱です。でも今頃そんな青年はゐない。深くなくとも多趣味であれといひたい。そしてそのうちの一つ位は深く。〔中略…引用者〕／音楽——ピアノでもバイオリンでも琴でも三味線でも、何でもよし。しかし和楽器をやるなら、洋楽器も何か一つ洋楽器をやるなら和楽器も何か一つそして、家庭に、下品でない流行歌を一ついつも流行させよ。歌ふものは心の明るい証拠である。しかし四六時中歌つてゐるのは我慢がならぬ。レコードはジャズ四分古典六分。〔中略…引用者〕／——こんな風に説いてゐてはキリがない。でつまり、モダン女性の趣味は所謂モダンな趣味であるべきだ。だがここに是非言つておきたいことは、モダンな趣味を持つと同時に、正反対の反モダンな趣味に、一つ位は通じてゐて貰ひたいことだ。即ち、生花と茶道とか。無理にそれをやるのではなく、さういふ趣味を、一つ位は面白いと思つて貰ひたいのだ。つまり東洋趣味の理解は、あなたのモダン美に、東洋的な美をつける。／どんなよい趣味でも、溺れるのはよくない。／他人の趣味は、どんな趣味でも、それを理解しやうとだけはせよ。自分の趣味に固定して他の趣味をつまらなと思ふな、長唄が自分の趣味であるからといつて、義太夫を攻撃する必要が何処にある。／趣味の広さ、その理解の範囲の広さは、即ち話題の豊富さ広さである。

（「モダン生活イデオロギー第三特輯 こんな趣味をお持ちなさい」1935.1 [360号]: 88）

ここでは、家庭婦人が「夫の趣味に同化」することを前提に、「モダン」な趣味をもつ場合は「東洋趣味」にも通じること、ただし熱中しすぎないこと、とされている。

同趣旨の記事として、「趣味の一致」の失敗による離縁話の紹介記事もある。

最近の結婚はいろんな意味で困難が伴つてゐる。その一つは教育の範囲が広まったために結婚の適応

性が狭くなってきた。文化の低い時代には、身体が健康でゑくぼがあつて愛嬌がある位で花嫁としての資格は充分であるが、文化生活の高い社会では趣味などといふ一つの点から云つても、なか〜合致しなくなる。相手は洋楽の趣味を持つてゐるが、お嫁さんは日本音楽で、ほかには云ひ分はないけれど、音楽といふ趣味に結ばれてゐながら正反対の取組のやうに考へられてまともならない例が多い。〔中略…引用者〕／私は嘗てお仲人をしたことがある。姉さんが二人あつたが、二人とも学者のうちに嫁入つてゐたが、世間からは尊敬されてゐるが、物質は豊かといふほどではなく、里から貢がねばならないやうであつたため、三番目の娘さんはお金持の実業家へ嫁がせるやうにお母さんが骨折つた。鉱山主で田舎のこと故旧式で、家は綺麗だが広くて淋しい。そしていつも姑と一緒に暮してゐる。これがまたヒステリーでそれに仕へるには容易でない。このお嫁さんは音楽が好きの人だつたので、嫁入り早々ピアノが欲しいと云つた。ところがびつくりして、かういふ要求を出すやうでは先が恐ろしいといふので、問題になつた。〔中略…引用者〕／物質の豊かな家庭へ行つて、音楽の趣味を伸ばしたら、きつといゝ家庭が出来たらうと考へたのに、とう〜離縁になつてしまつた。

〔医学博士 諸岡存「失敗した結婚」1938.11〔417号〕: 150〕

この記事では、夫婦間の趣味の不一致に加え、趣味に関する舅姑との軋轢に因る婚姻の破綻事例が記されている。同年の画報欄においても、三味線をたしなむ嫁が舅に微笑むグラビアがあり、そのキャプションは以下のようになっている。

ガラスと軽金属の家から三味線の爪弾きが聞へる。緑茶と畳の香、そして日本の着物。それ故にお舅さんは月のうち二度も、坊やの顔と此の情緒にひたる為、遠くからやつて来る。

〔「楽しむ家 お舅さんの問題」1938.1〔407号〕画〕

なお、鈴木（2000）の指摘にあるような、戦局の悪化に伴って、家庭内の趣味としてのみならず、夫に先立たれた際の自活の手段として音楽のたしなみ

を推奨する記事は『婦人画報』にもある。

これ等の所謂芸事を嗜むことによつて、情操を優雅にしその生活をどんなにうほひあるものにするかは知れないことであり、一方又実利的に考へても、若し何等かの事情で、女性が独立の生計を立てなければならなくなつた場合何れかの芸能を有してゐるならどんなに身を助けることかも知れないのである。

〔「女芸は何を撰ぶ」1933.5〔335号〕: 103〕

よく世間で芸は身を扶けると申しますけれど、それもどこまでも習ふもの研究するものを徹底的にやつて置かなくては、かへつて身をつぶす原因となることが多いやうです。／私などは矢張り一時芸で身をつぶすところでしたけれど、どこまでもやり通ほす決心を貫いたお蔭で芸に扶けられたやうです。私の母などは、小供の頃覚えて置いた三味線のために、維新後一家没落に会つて、夫に先立たれ、小供を抱えて立派に世過ぎをすることが出来たのです。／洋裁にしる茶の湯にしるピアノにしる、お習ひになるときは、少しだけでもマスターして置く積りで習つて置くと、今では思ひも及ばぬ事件が降つて湧いた時に、ちやんと自立することが出来るのです。

〔杵屋彌七（文責在記者）「お稽古ごと」1935.4〔364号〕: 141〕

このように1920～30年代の家庭婦人にとって音楽のたしなみは、稽古事に取り組む態度次第により、趣味から自活の手段まで幅広く位置付けられている。

（2）令嬢の日本趣味一箏、三味線のたしなみ一

箏、三味線、ピアノのたしなみは「令嬢」の生活の一部としても描写されている。例えば「令嬢のいち日—鈴木壽子嬢」（1926.1〔244号〕画）、「令嬢写真日記（一）」「同（四）」（1930.8〔301号〕画）があるが、「令嬢の時間表 医学博士峯正意氏令嬢菊枝さん」では、「モダンで教養なくては感ぜられぬ趣味のよさを感じさせ」る稽古事の一つとして、時間割風にピアノのたしなみを紹介している（1933.5〔335号〕画: 117）。

また、直接的に音楽のたしなみをテーマとする令嬢紹介グラビアもある。「音楽と令嬢」（1929.2〔283号〕

画：8-15)では17名の令嬢が(長唄10名、ピアノ7名、謡曲3名、鼓2名、洋楽2名、箏1名、音楽1名 延べ回答)、「音楽に堪能」(1929.4〔285号〕画：7)では3名の令嬢が(長唄、ピアノ、箏、謡曲 ヴァイオリン各1名)、「春を歌ふ」(同上：27)では3名の令嬢が(ピアノ2名、箏2名、長唄、ギター、マンドリン各1名)、アマチュアとしてたしなむ様子が紹介されている。また、個々の令嬢の技巧を強調した記事もある(「琴に秀でた今西千代子嬢」(1926.7〔250号〕画：13)、「ピアノの上手」(1928.4〔272号〕画：6-7))。

実業家藤山映氏の令嬢英子さん(一五)日本女子大学附属高等女学校一年に在学中であります、進歩の速いには先生伊藤貞雄氏も驚ろいてゐられます。(同上：6)

音楽にまつわる令嬢紹介で特徴的なのは、箏、三味線をたしなむ令嬢を紹介する際に「日本趣味」と形容されている点である(「音締の音」(1929.1〔282号〕画：42)、「日本趣味の」(1929.11〔292号〕画：25)、「日本趣味」(1930.1〔294号〕画：14))⁸。

実業家手塚当次郎氏の令嬢喜美子さん(二〇)は日本趣味のお方、長唄がお上手であります。東京女学館の御出身。(1929.1〔282号〕画：42)

1930年代に入ると、令嬢の箏、三味線等の技巧の高さは「古代趣味」「幽玄」「嬌艶」等の多様な表現と関わらせながら紹介されるようになる。

床しい古代趣味のお部屋に、おつとりと三味線をおとりになって今しもお稽古をお始めの麗人の名は、柳生綾子さん——元台湾銀行総裁柳生一義氏の令嬢でゐらっしゃいます。御趣味の長唄は、既に師(稀音家四女壽)の折紙のあるものですが、ゆかしい御謙遜で「雨垂れ三味線ですの……」など、ユーモアに富んだことを仰言つてゐました。

(「長唄をたしなむ人」1933.3〔333号〕画)

幽玄とっていか、玉を転ばすとっていか、弾ずる令嬢たちの手は十三の糸の上を、三つの糸の上をする〜とかけめぐるので、口はきつと結

ばれ、姿勢正しい上体は微動だにしないのです。芸の巧みと、平素からの修業による精神統一のできてゐることには、曲のわからない私たちにまで、何となく荘厳を感じさせられたほどです。

(「嬌艶・日本音楽の麗花」1934.12〔358号〕画)

1930年代後半には、読物欄においても三味線のたしなみは妙齡期に再発見される対象として紹介されている。

お母様のお胎にゐる中から三味線に聞き飽きた私、学校を出るまでお三味線を手にした事もなかつた私、そのくせ歌舞伎が何よりの趣味であつた私、おそまきながら十九歳でやつと初めて手ほどきをして頂いた私は、色々の意味でその奥深さに驚かされましたが、〔中略…引用者〕そして日本の人と三味線とはどうしても放れがたい存在である事を、しみじみ感じさせられる様になりました。

(赤星明子「三味線を知って…」1938.3〔409号〕：161)

(3) 偏らせない令嬢の趣味

このような1930年代における文化ナショナリズムの高揚や日本趣味の強調は北河(1982)、井上(2009：75-111)でも指摘されている。

ただし、1920～30年代に徐々に強調された3.(2)のような令嬢の日本趣味は、3.(1)に示したような、まだ見ぬ夫との趣味の一致を前提としたものであった。そこには、日本趣味を強調しながら敢えてモダン・西洋趣味を強調する記事をみることが出来る。

松平節子の存在による戦前昭和期の長唄の流行については拙稿(2015：220-222)でも触れたが、1928年の「特輯アルバム 松平節子姫」(1928.3〔271号〕：25-36)では、長唄とピアノのたしなみのあり様について詳述されている。

▷音曲のお嗜み◁ 御十一歳の時に吉住小常さんについて、姫は長唄と三味線の手ほどきを受けられました。それに前後して、謡曲も親戚筋にあたる松平俊子夫人に弟子入りなされました。／姫は音量は豊富、音声は美しく、然も三味線の撥さばきも巧みに、ずんずん上達されました。小常さんは、『もし高貴

の方でなかつたら、弟子として、その道を踏ませたいと考へたほどでした。』と云つてゐるくらゐです。仕上げられた段数は五十を数へ、「鶴亀」「吾妻八景」は、お得意のものであります。

▷楽しい集ひ◁ 姫が「鶴亀」をあげられた年のクリスマスの夕べの楽しい集りに、一門の方々が姫の邸に集まりました。その席には御伯母君にあられる梨本宮妃殿下も、二三の侍女を従へられて、御台臨あらせられました。その時、姫は「鶴亀」を師匠の介添えて唄はれましたが非常にお美事な出来栄で、妃殿下も御感心遊され、お賞めのお言葉を賜り、姫は大いに面目を施したことであります。

▷音楽の御才分◁ アメリカに御出発なさる前にお上になつたのが「吾妻八景」で、まる七年間、長唄の道にお励みになつたのですが、十年も習つた人以上のお腕前に進んでをられました。／またピアノは、最初は正式に御練習なされませんでした、いつか学友との間に交つて修得なされて、御近親の方の前で、団欒の一夜に興をそえられたこともおありで、当時、みんなはその御楽才に驚かれたといふことです。

〔中略…引用者〕

▷日本趣味を忘れぬやうに◁ だが、姫はワシントンで、アメリカ風に生活していらつしつつも、日本趣味をお忘れにならず、お茶とお花の稽古をなさいました。三味線も、つれづれのままに、お弾きになります。あくまでも、姫の日本的なやさしいお心は、ワシントンの生活に、日本の趣味のうるほひを、つけずにはゐられないのであります。

(同上: 27-31)

邦楽の習得は修養的に描写されるのに対し、洋楽の習得は才能の発揮の象徴として描かれており、この構図は、明治後期～大正期の婦人雑誌にもみられる(拙稿 2012)が、ここでは、「日本趣味を忘れぬ」ことが強調されている点に特徴がある。

1930年代の画報欄において、令嬢の箏、三味線の免状や技巧の高さを紹介するグラビアにおいても、以下のように、モダン・西洋趣味との両立が示されている。

浅草の橋場河岸に在る堂々たる日本家屋、二階の大広間に座ると隅田川が白い帆掛船を流して何となく懐かしい江戸趣味を展開してくれます。此の御家が正江さんの宅、歌澤をおやりになるのも無理もないと思はれる程びつたりした周囲です。〔中略…引用者〕純然たる江戸趣味なのにガルボが好きだなんて自分でも解せないわ、と不思議がつて居らつしやいました。

(「うたぎは——名取の令嬢—— 実業家林友吉氏令嬢正江さん 歌澤名——寅松和歌」1932.8〔326号〕画)

まだ双葉高女五年に在学中なのに既に名を取られた天才的なお嬢さんです。踊の方も名を持つてゐらつしやいます。非常にピチ〜した明朗な近代型の性格なのにシブイ歌澤が何よりも好きなんださうですから奇異の感にうたれます。

(「うたぎは——名取の令嬢—— 実業家升本喜兵衛氏令嬢喜代子さん 歌澤名——佐久水」1932.8〔326号〕画)

たゞ今丁度「若葉」なる、初夏の候にふさわしい古曲の一調がお済みになつたところ……お箏(山田流にて師は谷口清照氏)の他に、茶の湯、生花長唄などもなさり、豊かな日本趣味の持主でゐらつしやいます。が一方洋楽にも相当な理解をお持ちでした。それから素晴らしいコレクションに、数知れぬ豆人形を拝見いたしました……といふ実に多趣味の麗人でゐらつしやいます。

(「箏曲に聴く令嬢 荒木南都子さん」1933.6〔336号〕画)

日本女子大附属高女の御出身、／昨年以來御両親の御慈愛のもとに、家庭婦人としてのあらゆる教養の為に精進していらつしやいます。近頃のお嬢様には珍しいほど純日本趣味の方で、日本髪がよくおうつりになり、長唄やお茶のお稽古もこの方にこそ本當にふさはしく見えます。そしてその一面に洋裁にも興味をお持ちだといふことです。

(「日本趣味の令嬢」1933.8〔338号〕画)

4. 女学校卒業後の結婚準備というモラトリアム期間への社会的関心の高まり

1930年代は、高等女学校進学率の上昇⁹と満州事

変後の結婚難（高田 2005: 208-219）により女学校卒業後の結婚準備への社会的関心が高まり、女学校卒業後の過ごし方の一としての趣味の修養・教養が推奨される。

趣味としての修養は、オルガンと、三味線とを習はせて居ります。ピアノをやらせてはどうかと云ふ人もありますが、ピアノは日本では現在の所贅沢品であると思ひます。オルガンの程度なら、一寸他家へ運ぶ事も出来ますが、ピアノとなると、今の日本の家庭にピアノを置くだけの家は極少数だと思ひます。ピアノが買へないわけではないが、嫁に行く時にピアノを持って行くとなると、どうしても相手に金満家を選ばねばなりません。然し私は娘の相手としては、むしろ何もない、たゞ人物だけにほれこんで行くと思ふ位の所へ、やり度いと思つて居りますので、勿論そんな借家にはピアノは持ち込めません。自然習つたピアノも弾けないとなると、不平も起らうと思ひますので、この意味からピアノは控えて居ります。三味線は昔は芸者等がひいた為に、いやなものだと誤解されて居りますが、しかし私はこれこそ日本普通の音楽だと考へて居ります。（中村屋店主相馬愛蔵「女学校卒業後の家庭教育を如何にするか 自主自立の力を持たすために」1929.3〔284号〕: 90）

学校生活を離れた娘たち、お母様と家庭で大部分の時間を送る娘たちは何処に生活の焦点を見出したらいゝのでせう？ お母様は家政万般の実施教育をなさるお考へで、あれ、これと一々おつしやる。又女には趣味がなければと云つてお料理やお裁縫の外に、ピアノだ、長唄だ、舞踊だ、手芸だ、お花だ、お茶だと所謂お稽古ごとがはじめられる。

（平塚明「女学校卒業より結婚までの娘たちへ」1933.5〔335号〕: 84）

女学校を卒業してから結婚をするまでには、お裁縫やお料理の、実習も必要なことであるが、それ等実習に足けてゐるだけではどうしてももの足りない、現代人の家庭又は夫婦間の生活にとつて是非必要なものは趣味の教養である——それには、絵を学び、

歌を詠み、或は手芸を嗜む等、種々の道はあるが、最近では、和洋音楽又は舞踊等の遊芸を嗜むことが非常に流行してきた。—長唄、清元、歌澤、常磐津、或ひは謡曲等の日本趣味のもの、又はピアノ、ヴァイオリン等の洋楽など……

（「女芸は何を撰ぶ」1933.5〔335号〕: 103）

1930年代後半になると、たしなみをめぐる音楽の和洋は、女学校卒業後に本人や家庭の嗜好によって選択することが肯定されていく。森田草平は、「娘を持った両親への注文 娘の為に家庭を楽園とせよ」（1936.3〔384号〕: 60）の中で、「女学校を卒業してからは、お茶、活花、琴、長唄、踊、ピアノ、洋裁、絵画、料理等々、それぞれそのお嬢さんと〔の〕趣味と嗜好とによつて稽古に通はせる。そのお稽古の往来にも間違ひのないやうにと祈るのは、何時の時代にも変らぬ親心である。」としている。また、金沢うきは「適度のモダン味を娘にもたせよ 昔風に育て過ぎての苦勞 こうして結婚せよ 良縁苦心談四十八例」（同上: 197-198）の中で、「常盤〔磐〕津も私が下町つ子ですので、上の男の子達に反対されながら、矢つぱし続けさせたお蔭で、お師匠さんの秘蔵つ子になつたのです。」とし、古風な教育の象徴として常磐津を挙げている。一方、帝大教授桂井三氏夫人桂けいは、「同じ境遇を続けさせたい 娘さんを嫁がせた経験ある母さん」（1936.10〔393号〕: 93）の中で、「花嫁教育」としての西洋音楽の効果に触れ、以下のように述べる。

花嫁教育はどちら様でも同じやうでございませう、一通りのお稽古に通はせ、殊にお料理と音楽に最も重点をおきまして、日本料理、支那料理、西洋料理とも専門的に勉強させてをきましたが、これはみな喜んでをりますし、本当に必要なことだと思つてをります。音楽も、みな西洋音楽が好きでしてピアノかヴァイオリンをやつておきましたが、皆音楽好きの主人をもちましたので役立つと思つてをります。（同上）

「花嫁教育」の他に、「結婚教育」と表現している記事もある。「結婚教育 13 たゞ美しいだけでなく

彼と共通のものを持つこと」(1938.10 [416号])では、「男子と共通できるものを持つためには、「彼が楽器を愛してゐたら自分もそれへの趣味を養ふ」ことで、「結婚行進曲を奏でるまでに」至るとしている。音楽を含む趣味を結婚準備として捉える趣旨の記事として、菊池寛「幸福なる結婚」(1938.1 [407号]: 100-103)がある。

なお、『婦人画報』は「女芸相談」「講習所常設」「読者女芸発表会」「音楽映画の観賞会」「演芸関係諸施設見学」「近郊ハイキングを兼ね出先にての女芸講習」「読者家庭の園遊会等開催についてのプラン御相談に応ず」「女芸師家の相談機関」「女芸各師へ入門者御紹介」「授産事業」等の「女芸協会」としての事業を誌上で展開した(広告欄1936.3 [384号]: 103)。女芸協会編「女芸は何を撰ぶべきか」(同号: 102-103)の冒頭は以下のようになっている。

女学校を卒業して結婚するまでの二三年の間は娘時代の最も楽しい、そして尊い期間でありませう。
／学窓を出て、直接世間の娘としていろいろな見聞や経験をしたり、或は趣味才能の好むところに従つてそれへの途に専念することは、誰しもの大きなあこがれで、さうした希望には家庭でも可成に自由が認められるので、或は音楽の修業に或は洋裁の研究その他の女芸のお稽古に親んで情操や技能を豊かにしておくことは来るべき幸福な結婚の基礎となるものでこの期間こそ最も有意義に送らねばなりません。(同上: 102)

以上のように、令嬢の音楽のたしなみについて、一家団欒のための家庭音楽の実現→夫婦間の趣味の一致→女学校卒業後をはじめとする妙齡期の多様な趣味の修養・教養の推奨という、同パターンと言説が繰り返されてきた。

一方、上記が専ら修養・教養の内容や対象についての議論であったのに対し、その目的や態度については以下のような批判もあった。

まず、山田耕筰は「音楽と生活」(1939.4 [422号]: 135)において、令嬢たちに稽古事の「正道」を以下のように説く。

あなた方は、お稽古をなさつてゐるのだが、お稽古をしてゐる人は何でもいゝから、苦しくても正確な途を通る。それを覚えてしまふ迄やる。どんな時でも嘘が出来ないやうに、正しくやるのです。これは同時に、人生に対する態度を研ぐことにもなり、人生に対して一つの余裕を発見する立場をもつことになるものです。

また、結婚を控えた青年の視点からは、家庭生活につながる稽古事の「精神」の獲得や趣味を持たないことによる夫への順応が説かれている。以下は、大学生と大学出の社会人からなる「青年」の座談会の一部である。

記者 ぢや次に移りますが、結婚の相手として女の人の趣味とかお稽古事のことをどう思ひますか？

有福 僕は女の人がお茶だのお花だのお稽古事をするととてもいゝと思ふな、映画だのレヴユウなんかに夢中になるのは困るけど、お花を活かしてくれたり、たまの日曜には琴でも弾いて楽しませてくれるのはいゝね。

松田 ぢや貴方が尺八で合奏しますか！(笑声)
……

有福 いや僕は尺八やらんです。

稲葉 琴とか花をやるのにその精神を会得してくれたいゝと思ふね。精神が大切なんだ。〔中略…引用者〕

近藤 女の人はお稽古事に通ふと、時間的にも家庭から解放されている〜抜け道になるらしいですね、なか〜精神の会得とまではゆかないでせう。僕は女の人は何でも自分の好きなことをやればいいと思つてます。何かやれつて親から奨められてやるんぢやなく絵でも音楽でも自分の好きなものをやつた方がいゝ。

武川 僕は自分が音楽をやつてるもんだから反つて音楽の趣味のある人は煩いね〔。〕知識として持つてゐるのはいゝが実際にやるのは困る。〔中略…引用者〕

三輪 音楽でも絵画でも、芸術をやつて精神を擲んでれば、ネクタイ一つ買ふんでも家具一つ

買ふにしても、旦那様に気持のよい感じを与へるものを選べるのだが、実際はさういふことをちつとも考へてゐない。〔中略…引用者〕

武川 僕は一緒になるまでは順応性のあるいゝ素質さへ持つてゝくれたらいいと思ふね。始めから全然自分で教育しようと思んだ。音楽なんか生半可な下地があるのは却つて困る。

〔「1 どんな結婚を求めてゐるか 青年ばかりの座談会」1938.11〔417号〕:124-125〕

5. まとめと今後の課題

以上、戦前昭和期の『婦人画報』における「令嬢」と音楽のたしなみをめぐる言説について、箏、三味線、ピアノを中心に検討してきた。

そこでは、当時妙齡期とされた「令嬢」には、家庭婦人の理想的生活の一部を成していた家庭音楽や将来嫁する夫や舅姑との趣味の一致という規範の下、「日本趣味／モダン・西洋趣味」のどちらにも趣味を偏らせず、熱中もし過ぎないことが求められた。高等女学校進学率の上昇と事変後の結婚難を迎えた1930年代は、女学校卒業後の結婚準備というモラトリアムへの社会的関心が高まり、それまでに確立していた「令嬢」の芸術・芸能のたしなみは改めて「結婚のための／花嫁になるための」趣味の「修養／教養／教育／準備」として、明確な時間枠を与えられたジェンダー規範となったと考えられる。「令嬢」の規範として、趣味(taste)の深さよりも広さ(hobbyの数の多さ)を確保しておくという言説が大正期には登場していたが(拙稿2015)、戦前昭和期においてはこの規範に、「モダン」な文化の威信が確立する中での「日本趣味」の強調という文化ナショナリズムが結合し、さらには結婚準備としての時間枠が後付けされたことにより、未婚期の女性が敢えて伝統芸術のたしなみを強調する昭和期の花嫁修業像の原型が成立したことが示唆される。

一方で、このような花嫁修業像は理想の家庭婦人像から演繹的に鑄造されたものであり、「夫婦間の趣味の一致を望まない(結婚後に模索すればよい)」「趣味の修養を通じてより高度な精神性を身につけるべ

き」といった批判を招きやすいものでもあった。戦前昭和期にその原型を成立させた「花嫁修業」は、宮坂が報告したような「おしとやかで、何でもハイハイということをきく女性」を連想させる一方で、結婚生活に「実用的価値はあまりない」と(当人や男性側が)認識しつつも一応は伝統芸術の習得に励むという、ディレッタンティズムやスノビズムとも受け取られかねないたしなみ像の一種となった構図を見て取れる。

本稿では、分析の素材を『婦人画報』の「令嬢」像に、考察の対象を戦前昭和期の音楽、とりわけ箏、三味線、ピアノのたしなみに限定したが、今後分析の素材、考察対象、時代を拡大させ花嫁修業というジェンダー規範の成立をより総合的に考察する必要がある。また、階層文化の観点から、永谷健が指摘する実業エリートがとった華族を中心とする西洋趣味を強調する山の手文化への対抗のために伝統芸術のたしなみを強調したという戦略(永谷2007)と、「令嬢」の規範の対応関係も確認する必要がある。これらについては別稿に期すこととしたい。

付 記

本稿の執筆にあたり、2017年度昭和女子大学教育研究費の助成を受けた。

註

- 1 「花嫁修業」は、「結婚前に主婦たるべき技能や教養を身につけるべく、料理・裁縫・華道・茶道などの習い事をしたり、家事手伝いをしたりすること」(佐藤1996:689)、「結婚前に習得すべきだと考えられている女性のたしなみを身につけること」(小山2002)等と定義される。用語としては「花嫁学校」「大陸の花嫁」のように「花嫁」が人口に膾炙した(伊藤2012)、1930年代以降に普及したと推察される。実際に「花嫁修業(行)」を見出しに含む新聞記事は、『読売新聞』では、「頑張れ前畑!“心臓結婚”ゴールは寸前 挙式は七日」(1937/3/3夕刊。花嫁修業の内容は、小笠原流礼法、料理、茶の湯、生花、裁縫、箏、三味線)、『東京朝日新聞』では、「看護婦奇禍 花嫁修業の喜びを前に」(1937/2/19朝刊。花嫁修業の内容は女学校入学)が初出となっている。
- 2 ①工場労働者の労働賃金に対する俸給(サラリー)と

いう所得形態, ②工場労働者の肉体的力能に対する知識を媒介とした事務的な分配・管理労働という労働形態, ③資本家と賃労働者との中間に新しく勃興しつつあるという社会階級構成上の位置, ④生活水準の中位性, という四つの特徴を持つ(門脇 1988: 214, 寺出 1994: 184-186)。伊東壯の推計によると, 新中間層は 1920 年の時点で全国民の 5~8% を占め, 1912 年に比べ約 3% 増加している(伊東 1965)。新中間層の家族は, 「しばしば農村から学校教育を受けるべく都市へ流入し」, 「官公吏, 教員, 会社員, 職業軍人などの近代化とともに生まれ, 学校教育を媒介として獲得された近代的職業」に就いた農家の二男, 三男たる夫たちが「家庭から離れた職場へと通勤する俸給生活者としての生活を送り, 妻たちは生産労働から切り離されて, 主婦として, 場合によっては女中を使いながら, 家事・育児に専念」するといった核家族を形成した(小山 1999: 39-40)。

- 3 これらの先行研究の詳細は歌川(2016: 48-50) 参照のこと。
- 4 臨川書店編集部(2004) を参照した。なお, 同資料中において原本所在不明号(347, 352, 356, 359, 363, 366, 368, 373, 374, 376, 378, 379, 392 号) は 対象外とした。
- 5 なお, 同誌は長期にわたって「花嫁候補のカatalog」(佐久間 1995: 215) として氏名, 年齢, 学歴, 取り組んでいる稽古事等に関するキャプションつきで「令嬢」の写真を掲載していたが, 今回は, キャプションのプロフィールにのみ音楽のたしなみに関わる情報が提示されているグラビアは考察対象としなかった。茶道, 生花等のたしなみの紹介のされ方とともに今後の課題としたい。また, 「令嬢」と称されていても音楽家・邦楽師匠として生計を立てていると判断される人物の記事や音楽学校在学中の「令嬢」については検討の対象から外した。
- 6 以下, 『婦人画報』からの引用に際しては, (発行年月〔号数〕: 頁数) で示す。画報欄中のグラビアを引用する際は, (発行年月〔号数〕画) とする(該当頁数が特定できる場合に示す)。引用文のルビは省略, 漢字は原則として新字体表記とし, 欠字・誤記・誤植と思われる箇所は [] 内に補正し, 改段は / で示した。なお, 引用原文の一部には, 現在の視点から不適切な表現が含まれるが, 資料としての性質上, 原文のままとした。
- 7 なお, 山田は, ドイツでは「日本人の家庭で琴を弾き, 三味線をやっつゑる程, ピアノをやっつゑるとは思ひ

ません」と述べている(山田耕祥「音楽と生活(座談会)」1939.4 [422 号]: 128-129)。

- 8 「日本趣味」(296: 25) では謡曲, 太鼓をたしなむ令嬢が紹介されている。
- 9 高等女学校の進学率の推移は, 1925 年(14.1%) → 1930 年(15.5%) → 1935 年(16.5%) → 1940 (22.0%) (『文部省年報』各年度参照。)

【引用・参考文献】

- 陳含露(2016)『『婦人画報』「令嬢鑑」における明治末期から大正期のお嬢様像—文字テキストからの分析』『外国語学会誌』45, pp.191-203.
- 堀垣一郎(1967)「学習内容編成の構造」平沢薫編『現代社会教育の実践』進々堂, pp.103-124.
- 市原光匡(2003)「学習行動に関する実証的研究の展開」鈴木眞理・永井健夫編著『生涯学習社会の学習論』学文社, pp.153-165.
- 今田絵里香(2007)『「少女」の社会史』勁草書房。
- 稲垣恭子(2009)「武家娘と近代:「女のいくさ」と言説空間」『教育・社会・文化』12, pp.1-10.
- 井上祐子(2009)『戦時グラフ雑誌の宣伝戦—十五年戦争下の「日本」イメージ』青弓社。
- 伊藤めぐみ(2012)「戦間期における『花嫁学校』の生成と展開」『早稲田教育学研究』4, pp.39-53.
- 伊東壯(1965)「不況と好況のあいだ」南博編『大正文化』勁草書房, pp.172-195.
- 門脇厚司(1988)「新中間層の量的変遷」日本リサーチ総合研究所編『生活水準の歴史的的分析』総合研究開発機構, pp.213-249.
- 北河賢三(1982)「1930年代の思潮と知識人」鹿野政直・由井正臣編『一九三一年から一九四五年まで』日本評論社, pp.135-166.
- 小山静子(1999)『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房。
- (2002)「花嫁修業」井上輝子ほか編『岩波—女性学事典』岩波書店, p.380.
- 久米依子(2013)『「少女小説」の生成—ジェンダー・ポリティクス』青弓社。
- 南博(1980)『南博社会心理論集3—日本人の芸術と文化』勁草書房。
- 宮坂広作(1970)「余暇と社会教育」碓井正久編著『社会教育』第一法規, pp.201-233.
- 永谷健(2007)『富豪の時代—実業エリートと近代日本』新曜社。
- 臨川書店編集部編(2004)『DVD-ROM 版—婦人画報〈昭和期〉』

- 佐久間りか (1995) 「写真と女性—新しい視覚メディアの登場と『見る／見られる』自分の出現」奥田暁子編『女と男の時空—日本女性史再考V 闘ぎ合う女と男—近代』藤原書店, pp.187-237.
- 佐藤健二 (1996) 「花嫁修業」比較家族史学会編『事典 家族』弘文堂, pp.689-690.
- 周東美材 (2008) 「鳴り響く家庭空間—1910-20年代日本における家庭音楽の言説」『年報社会学論集』21, pp.95-106.
- (2011) 「書物のなかの令嬢—『趣味大観』にみる昭和初期東京における音楽—」『研究紀要』第35号, pp.57-78.
- 鈴木幹子 (2000) 「大正・昭和初期における女性文化としての稽古事」青木保ほか編『近代日本文化論第8巻 女の文化』岩波書店, pp.48-71.
- 高田里恵子 (2005) 『グロテスクな教養』筑摩書房。
- 高月智子・能澤慧子 (2003) 「1920年代若い女性の理想像：『婦人グラフ』に見る令嬢たち」『東京家政大学博物館』8, pp.185-194.
- 玉川裕子 (2017) 「近代日本における家庭音楽論—『一家団欒』という未完の夢—」『桐朋学園大学研究紀要』43, pp.57-76.
- 寺出浩司 (1994) 『生活文化論への招待』弘文堂。
- 津上智実 (2012a) 「婦人グラフ雑誌『淑女画報』(1912～1923)に見るピアニスト小倉末子と閨秀音楽家たち」『神戸女学院大学論集』59(1), pp.121-132.
- (2012b) 「明治大正期の『婦人画報』(1905～1926)に見るピアニスト小倉末子と閨秀音楽家たち」『神戸女学院大学論集』59(2), pp.169-182.
- 辻功 (1973) 「日本人の学習要求」辻功・古野有隣編著『日本人の学習—社会教育における学習の理論—』第一法規出版, pp.11-75.
- 歌川光一 (2012) 「明治後期～大正期女子職業論における遊芸習得の位置—楽器習得に着目して—」『文化経済学』9(2), pp.68-78.
- (2015) 「女性と音楽のたしなみの日本近代」玉川裕子編著『クラシック音楽と女性たち』青弓社, pp.200-230.
- (2016) 「近代日本における中上流階級女子のたしなみ像—19世紀末から20世紀初頭東京の音楽文化に着目して—」東京大学大学院教育学研究科博士学位論文

(うたがわ こういち 初等教育学科)